

幼児と高齢者の世代間交流の現状と問題点

渡 辺 優 子

The Mingling of old People and Infant

Yuko Watanabe

、はじめに

少子高齢化、核家族化、地域の結びつきの低下などの社会の変化に伴ない、子ども達の成長の面からも、又、高齢者の生き甲斐、社会参加の意味からも世代間交流が推し進められてきた。21世紀を迎え本格的な少子高齢化社会到来の下（平成14年の65歳以上の人口は18.5%、合計特殊出生率は1.32¹⁾）世代間交流の現状と問題点について、先行事例を概括し考えてみたい。

、世代間交流の現状

1、世代間交流の進展

世代間交流は、子ども達との交流で高齢者が生き甲斐を持ち、地域社会に対し貢献をすることと、子ども達も高齢者との交流で地域の文化に目覚め、地域の人々と豊かな関係性を持って成長して行くことを目指して、1970年代後半より各地で行われて来た。地域のまとまりや地域の人々の関係性が薄れて行く中で、世代間の交流や学習で地域社会の活性化が計られ、「明るい住み良いふるさとづくり」や「ふるさとふれあい活動²⁾」など、様々な活動が行われて来た。

幼児の保育についても、単に保育所の同年齢の集団保育だけでなく、地域の人々や高齢者との交流、異年齢児交流、地域の伝統を生かした保育内容、地域の福祉的需要への貢献、地域の子育て支援等の必要性が認識され、「地域に開かれた保育園³⁾」を追求する方向が打ち出されて来た。

厚生省では、昭和62年から、保育所措置費の中に保育所機能強化推進費加算項目を作って、延長保育、地域の実状に応じた特別の保育科目（老人福祉施設訪問等世代間交流事業、地域の異年齢児との交流事業、入所児童の保護者への育児講座、郷土文化伝承活動）を設定するなどの保育所機能の強化推進を図るための経費について加算されるようになった。これは平成元年度からは保育所地域活動事業に組み込まれ、補助金に切り換えられた。事業の実施状況は初年度で世代間交流は578ヵ所、郷土文化伝承活動105ヵ所だったが、急速に拡大して、平成12年度は、延べで、世代間交流8,715ヵ所、郷土文化伝承活動1,710ヵ所であり、平成13年度は郷土文化伝承活動が世代間交流事業に統合され、実施保育所は全国で延べ9,042ヵ所であった⁴⁾。平成13年度の保育所数は全国で22,211である。

平成12年度より施行された、幼稚園教育要領、保育所保育指針では、幼児の成長が家庭を基盤とし、

地域社会を通して広がりを持つことから、家庭と地域の連携を保つこと、地域の自然、人材、行事や公共施設などを積極的に活用し、幼児が豊かな生活体験が得られるように工夫することを求めている。同時に、平成12年より実施された、少子化対策推進基本方針並びに、新エンゼルプランにおいても、保育所地域活動事業が推進され、多様化する保育需要への対応、地域に開かれた保育所として専門機能を地域に生かすことを趣旨として、12項目の事業⁵⁾の中に、世代間交流も推し進めている。

2、保育所ホームページに見る世代間交流

新潟県保育連盟では県内保育園をホームページで紹介しているが、⁶⁾保育所の多くでは、なんらかの形で世代間交流に取り組んでいる。老人施設慰問、高齢者と共に地域の伝統や特色を生かした行事、遊び、食生活等を楽しみ、高齢者を先生として教えてもらう、あるいは園の行事へ高齢者や地域の人達を招待するなどである。各園によって園の紹介の仕方はいろいろであるので、園の活動の全てについて必ずしも取り上げている訳ではないが、15年度では、全733園中434園(59.2%)で世代間交流の記載があった。具体的な内容が記載されているものには次のものがある。(回答数)

老人施設との交流(152 年に複数回も含む) 敬老会(74)、祖父母交流会(94 お招き会・ありがとう会等のネーミングが変わっているものも含む)

行事 運動会(20)、七夕(19)、もちつき(14)、夕涼み会(13)、節分(8)、遠足(5)、誕生会(4)、お茶会(4)、発表会(3)、作品展(3)、祭(4)、卒園(2)、ひな祭り(2)、給食会(2)、盆踊り(2)、お花見(2)、クリスマス会(2)

共同作業 花作り・畑作り(32)、笹団子・ちまき作り(19)、だんご・草もち作り(4)、もち草つき(1)、焼きいも(1)

遊び レクリエーション(3)、遊び(2)、こま回し(1)、たこ作り(1)、すもう(1)、ゲートボール(1)、ミュージックケア(1)、保育キーパー(1 毎月1回おじいちゃん遊ぶ)

伝統的な内容 まゆだま飾り(11)、ししまい(2)、どんど焼(2)、伝承遊び(2)、和太鼓(1)、焼き物(1)、鮭(1)

その他 一人暮らし老人との交流(5)、地域高齢者訪問(1)、寝たきり老人宅訪問(1)、虚弱老人との交流(1)、一人暮らし老人給食ボランティア(3)

交流内容不明(20)

地域の高齢者(老人クラブ等)との交流の記載があるものは74であった。高齢者は園児の祖父母である場合、施設入所・通所者、地域の老人会などであると考えられるが、地域の老人との交流の記載は地域性がある。ホームページ記載方法の違いによるのか不明だが、古志郡、新井市、西頸城郡、北魚沼郡、両津市、長岡市、柏崎市などで記載が多い。

3、世代間交流団体

世代間交流は保育所、幼稚園が主体となっただけではなく、公民館、社会福祉協議会、老人会、老人福祉施設等が主体となったり、それらの団体や機関同士の協力で行われていることも多い。「心豊かな長寿社会を考える国民の集い」(総務庁高齢社会対策室)でまとめた「平成11年の世代間交流活動事業例一覧」⁷⁾では、全国から事例が上げられている。全33の団体中、老人クラブ16、趣味の会・ボランティアグループ8、保育園・小学校2、趣味の会会員相互の世代間交流2、その他5(社会教育学級1、高齢者学級1、地区社会福祉協議会1、高齢者地域活動推進委員会1、体験交流事業運営委員会1)であった。この事例には、参加団体の平均年齢が記載されている。老人クラブ(最

低70歳～最高78.6歳 団体間の平均年齢73.6歳)、趣味の会・ボランティアグループ(最低48歳～最高83歳 団体間の平均年齢59.5歳) 趣味の会会員相互の世代間交流(30歳・59歳) 小学校・保育園は年齢記載なし、その他(最低70歳～最高72歳 団体間の平均年齢71歳)であった。ちなみに平均年齢83歳のグループは、福井県丸岡町「老人薬草園」であり、薬草の学習や畑仕事を行い、幼稚園児とさつまいも掘りを行っている。老人クラブでは、一種類の活動だけでなく、数種類の活動を年間を通して行っている所も多い。例えば、水戸市の上大野高齢者クラブ連合会では、会員170名で、小学校と年5回の交流(スポーツ、郷土玩具製作、民話の伝承、ふれあいゲーム、演劇)を行っており、幼稚園では演劇を上演している。盛り沢山の活動を展開するためには、クラブメンバーの得意分野を生かす工夫や、活動を支える組織作り、小学校・幼稚園との連携が不可欠である。

4、世代間交流を支える組織

社団法人エイジング総合研究センターでは、平成6年3月に「世代間交流に関する調査研究」報告書(総務庁長官官房老人対策室委託調査)を提出し、全国都道府県から推薦のあった世代間交流を活発に行っている事例302から10例を選び、調査・分析を行った。この中で、老人クラブが保育園や小学校との世代間交流を進めている、島根県海士町(隠岐群島 中の島)の事例から、世代間交流を支える組織について考えてみたい。

海士町では地域の老人クラブが14あり、3ヶ所の保育園、2ヶ所の小学校と年間を通じて交流を行っている。老人クラブとしての社会参加活動は、交流事業 元気高齢者が独居高齢者を訪問する「友愛訪問」と、地区と地区が親睦を深めるための「地区間交流」 65歳未満の次期会員候補者及び会員以外高齢者との交流事業 保育所・小学校との交流の3つがあり、保育所や幼稚園との世代間交流については、保育所、小学校の要請に基づき、老人クラブから必要な人材を派遣する形を取っている。人材派遣の基は公民館のシルバー人材養成事業にあり、老人クラブ連合会から公民館に人材を登録したのが始まりであった。又、老人クラブ連合会は町の社会福祉協議会と緊密な連絡を取って活動している。事務局が同じ場所にあり、両方の事務局長が兼任である。

事業の費用は、保育園分は保育所地域活動事業の補助金をあて、小学校分は社会福祉協議会からの福祉活動助成金と公民館の人材活用事業費を当てている。

保育所での活動は、各園で違いがあるが、ふれあい遠足、ちまき作り、いも苗さし、夕涼み会、盆踊り講習会、地区老人会訪問、老人施設交流、運動会、お話作り、焼きいも試食、クリスマス会、もちつき大会、お手玉作り、節分豆まき、生活発表会、入園式、卒園式などが行われ、老人クラブ会員、園児の祖父母、老人施設の入居者などが参加している。

小学校の活動はわら細工、竹細工、お手玉、編物、陶芸、独居老人宅訪問などである。小学校の運動会には地区の人々が参加し、敬老祝賀会も地区と学校との共同企画で催される。

海士町の高齢化率は平成2年時点で26.6%であり、核家族化も進んでいる。1つの保育所の例では、園児の70%が核家族であり、高齢者との交流を園児も楽しみにしている。小学生も高齢者の巧みな技術に驚き、交流を楽しんでいる。高齢者も子ども達との交流を喜び、励みにしている。又、世代間交流が他地区の高齢者同士の交流の場にもなっている。地域の行事として運動会や敬老会を大切にしており、子ども達の成長を地域で見守る意識が育っている。

海士町の世代間交流事業は老人クラブ、保育園、公民館、社会福祉協議会の協力・連携の下行われていたが、「世代間交流に関する調査研究」報告書の他の9団体についての組織や協力体制は次の通りである。

- ・高齢者と若者のふれあい住宅（北海道音更町）
 - 高齢者と若者（短大介護福祉専攻）が共同住宅に住み、交流をする。
 - 町の事業（高齢者福祉対策構想の一環）と短期大学の協力+ボランティア+保健婦
- ・高齢者福祉教育推進事業（栃木県）
 - 栃木県内小・中・高校における福祉教育推進
 - 県教育委員会 高齢者福祉教育研究協議会（福祉教育の手引き作成）
 - 福祉学習用ビデオ教材、福祉機器、介護用品、講演会の整備体制が取られている。
 - 各学校の工夫を生かした取り組みが展開されている。
 - 各学校での体験学習については、社会福祉協議会、施設の協力が必要
- ・親老児童館（群馬県笠懸町）
 - 幼稚園児、小学校低学年児童が放課後を過ごす児童館に専任の職員以外に老人職員が配置される。
 - （1日3名 ローターションで1人1週間に1回）
 - クラブの設置運営：社会福祉協議会
 - 老人職員の選任：老人クラブと高齢者能力開発センター
- ・手作り発見事業（千葉県三芳町）
 - 中学生への伝統工芸伝承活動
 - 教育委員会が事業主体、老人クラブ連合会、中学校、PTAの協力
- ・家庭クラブのボランティア活動（富山県上市町上市高校）
 - 町を上げてのボランティア活動
 - 高校家庭クラブでのボランティア：多種のメニューで、生徒の自主性を尊重した活動を展開
 - 福祉教育委員会（小中高教員）、社会福祉協議会、地域サークル、施設の協力
- ・健やかふれあい事業（岐阜県美濃加茂市）
 - 「ふれあい風土舎」を中心とした世代間交流、地域活性化事業
 - 老人クラブ連合会、若手商店主会、婦人会、宿の市会、中山道を愛す会
 - 活動資金獲得のため各種補助金を申請する際は市が後援する。
- ・在宅老人ふれあい活動助成事業（京都府京都市）
 - 学区ごとに小学生や幼稚園児と高齢者の世代間交流を行い、交流会1回につき5,000円が市社会福祉協議会より補助される。
 - 社会福祉協議会の事業、学区社会福祉協議会と小学校等の協力
- ・中学生による友愛訪問活動（兵庫県竹野町）
 - 中学生がホームヘルパーと一緒に一人暮らし老人宅や、寝たきり老人宅を訪問し、ヘルパーの仕事を手伝ったり、話し相手をする。
 - 社会福祉協議会と中学校の協力、中学生へのホームヘルパーの助言
- ・蒲生町世代間交流事業（鹿児島県蒲生町）
 - 小中学生、高齢者、地域の人々の世代間交流活動
 - 教育委員会の事業 地区公民館と地域作り指導員（地区1名を任命し公民館・家庭・学校の連絡にあたる。）を中心とした協力体制
 - 毎月第3土曜日を青少年育成の日とする。
 - 各地区運営委員会（公民館役員、地域作り指導員、子ども会育成会委員、老人クラブ役員、PTA）

5、併設施設での世代間交流

少子高齢化時代の地域福祉の課題として、高齢者と幼児・児童の世代間交流を地域の生活の中で進めるため、又、施設運営上の理由（子どもが減った施設を建て替え、高齢者施設と併設する。土地が高いので高齢者施設と児童施設を併設する。）等で児童施設と高齢者施設の併設が進められている。

国際長寿センターのアンケート調査[「老人と子ども」統合ケアに関する自治体の取り組み状況調査] 1998年（平成9年）では、全国の自治体1,000へ調査を行い、37%から回答を得た。⁸⁾

調査の結果より、特に保育園・幼稚園と高齢者施設の併設状況、併設施設での世代間交流にポイントを絞って見て行きたい。

回答のあった市区町村で施設の合併があるものは21.9%、合併がないものは78.1%であった。

併設されている児童施設

保育園（72） 幼稚園（7） 学童保育所（5） 児童館（32） 乳児院・養護施設（3） 心身障害児施設（3） その他（13） 不明（1）

合併施設全体での交流については、日常的、定期的な交流有りが79.7%、交流はないが18.1%、2.2%は無回答であった。

保育園・幼稚園と施設の併設 79施設

内訳	保育園・幼稚園と養護老人ホーム・特別養護老人ホーム	23施設
	保育園・幼稚園とデイサービスセンター	29施設
	保育園・幼稚園と高齢者福祉センター	21施設
	保育園と老人保健センター・デイケアセンター	1施設
	保育園と高齢者用住宅	1施設
	保育園とその他	3施設
	保育園と施設不明	1施設

保育園・幼稚園と併設施設の交流内容

*行事での交流

誕生会（毎月1回） 七夕、夏祭り、盆踊り、遊戯会、芋掘り、運動会、敬老会、勤労感謝の日、クリスマス会、もちつき、子どもの日、ふれあい祭り、節分、ひな祭り、三世代レクリエーション大会、観桜会、菊見会、音楽会、発表会、年末子ども会、作品展、三世代作品展、合同作品展、シルバーセンター祭りに参加、クロッケー交流会、お茶席交流会、遠足、旅行、バザー、移動動物園、合同震災訓練、観劇

*その他の交流

- ・ 伝承遊びを一緒に楽しむ
- ・ 伝承遊び、お手玉作り
- ・ 高齢者が紙芝居や和楽器演奏、遊び、フォークダンスをする。
- ・ 空き缶拾い、さつまいも作り、笹まき作りを一緒にする。
- ・ 毎週決まった曜日に、高齢者、ボランティア、障害者も一緒に手話・手遊び、劇などで交流する。
- ・ 不定期にリトミックをする。
- ・ 毎月1回園児が合奏をする。
- ・ 週1回遊戯具で遊ぶ。
- ・ 毎月1回交流会

* 日常的な交流

- ・ 日常的に遊びに行く。
- ・ 園児が朝の挨拶に行く。
- ・ 散歩の際に訪れる。
- ・ 園児が毎日ローテーションを組んで訪問。
- ・ 昼食を同じ食堂で取る。
- ・ 定期的に訪問し、園児と高齢者がペアを組んで過ごす。
- ・ 昼食後園児が車椅子を居室まで押す。
- ・ 週 1 回園児がデイサービスに行きゲームなどをする。
- ・ 施設の日常訓練に園児が参加する。 風船バレー、ダンス、リース作り、ちぎり絵、遊戯
- ・ 共同制作をする。 こいのぼり、ミニねぶた、交通安全マスコット
- ・ 毎日園児が施設を訪れ、ゲームなどをする。

* 交流をしない施設とその理由 特別養護老人ホームと保育園の併設施設

風邪などの病気がうつる。敬老の日、勤労感謝の日は子どもが作品を渡す。

併設施設での交流はそうでない場合と比べて、交流行事の回数が多く、行事を合同で行っている場合も多く見られる。又、日常的な交流も多く、生活の中での体験を通じた幼児の成長という意味で効果的であり、施設の高齢者からも好評であった。併設施設全体の評価で、交流がある場合には、「高齢者に好評」は90%になっている。

6、高齢者施設から提案される交流活動（おもちゃ美術館）

〔「老人と子ども」世代間交流に関する自治体調査〕にも2例あるが、施設側からの地域世代間交流の提案として「おもちゃ美術館」の取り組みがある。調査の中では、福祉総合センターとおもちゃ図書館の併設（滋賀県愛知川町）とB型デイサービスセンターと地域療育活動総合援助事業活動「おもちゃの家」の併設（島根県平田市）の2例があった。

おもちゃ美術館の運動は、芸術教育研究所所長多田千尋氏によって進められている。もともとは地域の子どものために、昭和40年代からの「小さな小さな児童館」運動（地域の人達が自分達の得意分野を生かして、月に1回、家庭内で子ども達との集まりを持った児童文化活動）から始まった。その活動の中に「おもちゃ遊び児童館」があった。その後おもちゃ美術館は障害児施設、老人福祉施設にも併設されるようになり、地域の子どもの達、障害児、母親、高齢者が無理のない自然な交流が出来る空間を提供している。おもちゃや絵本は高齢者も子ども達も同じ気持ちで楽しむことが出来る。又、施設におもちゃ美術館があることで、地域の子どもの達や母親が日常的に施設を訪れおもちゃで遊び、施設の高齢者もそれを喜び、楽しみ、子ども達のために読み聞かせをしたり、おもちゃ作りを始める契機になっている。⁹⁾

熊本市の特別養護老人ホーム天寿園では平成4年におもちゃ図書館が設置され、独自の世代間交流活動が進展してきた。¹⁰⁾ 天寿園の活動は大きく分けて次の3通りである。 高齢者と子ども対象（お楽しみ会、木工遊び、陶芸サークル、おもちゃ教室、園児交流会、ボランティア受け入れ、小学校との交流） 母子対象（母子対象の会にも高齢者の出席がある）{ふれあい座談会（育児相談会）ありすの会（障害児の遊びサークル）母子サークル3グループ} 通常利用（月曜・年始年末除く毎日9:30~17:30無料） おもちゃ図書館活動参加人数は平成8年には延べ4,033人（子ども、母親、入居高齢者も入れて）にも上っている。

入居高齢者は子ども達との交流の中で変化して行った。発展型：心を開いて自発性が見られるようになった。自己実現型：他の人のために役立つ経験をして、自信や生きがいを持つことが出来た。又、障害があり、他者とのコミュニケーションが取りにくい高齢者の中には、自身の変化は少ないが、おもちゃ図書館に来て子どもや他の人々と一緒に居ることを楽しみ、子どもをあやすなどする人もいた。

小学生の中には、自発的に園に遊びに来て居室を訪れたり、夕食の配膳などを手伝う子どもも出てきた。ただ、最初は園内を走り回ったりして、迷惑をかけることもあったようである。

おもちゃ美術館の運動はまだ広まってはいないが、子ども達が気軽に立ち寄れる場を提供し、おもちゃや絵本を介して、高齢者との自然なコミュニケーションが取れる有効な方法であると思われる。

、今後の課題

世代間交流について先行事例を見てきた。幼児と高齢者の世代間交流は保育園などで取り組まれ、地域の実態や園の独自性も発揮し、多様な行事が組まれている。ただ、行事はともする片方からの一方的な関わりになることも考えられる。双方が交流できる方法を工夫をして行かなければならない。富山県氷見市速川保育園でのお招き会は、伝承遊びのコーナーで遊んだ後、園児の発表があり、郷土芸能の獅子舞には飛び入りする祖父母もあるということである。¹¹⁾この様な園児と高齢者相互交流の含まれるプランを考えることが必要である。又、現在保育園や幼稚園の行事には、保護者のみならず、母方、父方の祖父母も多く参加している。家族形態の変化から、三世代同居世帯が減少している現在（2002年厚生労働省国民生活基礎調査では、単独世帯23.5%、核家族世帯60.2%、三世代世帯10.0%、その他6.3%）核家族で育つ多くの幼児にとって、又、普段孫に合う機会の少ない祖父母にとって、園の行事は互いの交流の良いきっかけになっている。しかし、祖父母の関心が自分の孫にのみ注がれているのでは交流の目的は果たせないのではないだろうか。祖父母が孫を通して子ども達の育ちに関心を持ち、行事に参加した祖父母世代間で交流を持つことや、孫の方も自分の祖父母以外にもいろいろな高齢者がいることに気付くことも大切ではないかと思われる。

「子どもにとっての祖父母の意味」調査（深谷昌志 小学校5年生への調査1991）¹²⁾によれば好きな祖父母は 母方の祖父母>父方の祖父母 別居>同居 祖母>祖父であった。同居より別居の方が好かれている。しかし、祖父母の生活を良く知っているのは祖父母と同居している子ども達であり、「両親が寝たきりになったらどうするか」の質問には、同居の子ども達（64.5%）別居の子ども達（54.8%）で、同居の子ども達の方が「同居して面倒をみる」という回答が多かった。又、「近くのお年寄りと話す」のも同居（33.3%）別居（27.5%）で同居の方が多かった。

以上の結果から見えてくるものは、祖父母と別居している子ども達は、祖父母に対して良いイメージを持っているが、祖父母の実態はよく分かっていないし、面倒を看ることについても、イメージが少ないということである。三世代同居が減るのは時代の趨勢であるので、祖父母と別居の子ども達の良いイメージを大切にして、なおかつ多様な高齢者とのふれあいの場を幼い頃から作って行くことが大切ではないだろうか。園の祖父母対象行事でもそのような観点で内容を考えることが必要となって来る。

地域の高齢者との交流も地域の特色、高齢者の特長、地域のニーズなどを生かしたものが望まれる。新潟県保育連盟保育所ホームページに、園の外に出る時は地域の人達に挨拶をしたり、話をするというものもあった。この様な日常的な生活の中の付き合い方なども大切にしたい。地域高齢者宅訪問なども散歩の途中で寄るなど出来れば、自然なふれあいになるであろう。保育キーパーという、地域の

高齢者に定期的に園に遊びに来てもらうという企画もあった。行事だけでなく、日常の保育の中で地域の高齢者と身近に交流することも必要ではないだろうか。

老人施設と併設の保育園の事例では行事以外でも日常的な交流が見られた。園児が朝の挨拶に行く、園児と入居者がペアになって過ごす、園児が施設を訪れ入居者の日常の作業・ゲームなどを一緒にやる。昼食を一緒に取るなどであった。

又、天寿園おもちゃ図書館では、おもちゃを媒介にした「場」における交流が特徴的であった。昔から、高齢者が幼児の世話をしたり、暇があれば一緒に遊んだり、幼児が遊んでいるのを見守ったりすることはよくあった。それに似た状況がおもちゃ図書館に生まれている。これまでは、家庭や地域に普通にあったものであるが、それを、違う形で作り出して行かなければならない状況になっている。

山崎高哉は、高齢者教育について、三つの類型に分類している。¹³⁾ 高齢者のための教育 高齢者を教育の対象として、彼らの学習ニーズにこたえようとするもの 高齢者についての教育 高齢者を教材として若年者に高齢者理解を促進しようとするもの 高齢者による教育 高齢者が若年者との交流において教育者の役割を果たし、長い人生のなかで培った豊かな経験と英知を若い世代に伝承するとともに、「生きがい」を持って社会活動に積極的に参加できるようにしようとするもの このなかの と が世代間交流に関係してくるものとしている。その中で「 高齢者についての教育 高齢者を教材とする」については幅広い解釈ができるのではないだろうか。たとえば、高齢者が子ども達になんらかの自己表現活動（会話、仕事、遊びなど）をして見せること、子ども達が高齢者の世話などをすること、高齢者と子ども達が一緒に何かをやること、挨拶などの日常的な関わり、又、特別になにもしないでも一緒にいることを通して見えてくるものもある。この「教育」は相互的な作用を持ったものである。現在の保育園の世代間交流活動では「 高齢者による教育としての世代間交流活動」や「高齢者と子どもが一緒になにかをやること」は多く取り上げられている。しかしその他の試みは多くはない。特に幼児と高齢者間の交流においては、「特別になにもしないでも一緒にいること」を通し互いに影響しあうものがあるのではないだろうか。天寿園の例で、障害のためにコミュニケーションが取れない高齢者が、おもちゃ図書館で子ども達と一緒にいることを楽しんでいる姿があった。このようなこともこれからの世代間交流の一つの姿になって行くと思われる。

世代間交流は関係する団体やグループ、個人の協力体制のもとで実現できる。世代間交流事例では老人クラブ、趣味の会、公民館高齢者学級、社会福祉協議会、町の高齢者地域活動推進委員会、町の体験交流事業運営委員会などが上がっていた[「世代間交流に関する調査研究」報告書]には、町、地域の短大、教育委員会、高齢者福祉教育研究協議会、公民館、社会福祉協議会、地区社会福祉協議会、老人クラブ、高齢者能力開発センター、保育園、小学校、中学校、高等学校、地域づくり指導員、育成委員、PTAなどがあり、様々な組み合わせで協力していた。学校関係は教育委員会の事業が多いが、主に取りまとめているのは、公民館であったり、学校であったり、社会福祉協議会の場合もあった。保育園、児童館などは保育園や社会福祉協議会の事業である場合が多かった。地域おこしについては、老人クラブ、若手商店主会、婦人会など地域のいろいろなグループの協力があつた。

保育園での世代間交流を考える時、協力団体・個人との連絡体制が大切である。世代間交流事業が始まった頃には、保育園長が自ら地域の団体やサークルに加入して人脈を広げ、交流活動に生かしたこともあつたようである。現在でも保育園として地域の情報に注目して行かなければならないが、地域の教育力や福祉力を生かすための組織作りも必要ではないだろうか。公民館や社会福祉協議会などが中心となるのも良いし、高齢者地域活動推進委員会（和歌山県桃山町の例）や体験交流事業運営委員会（大分県荻町の例）を中心におくことも考えられる。木原隆久は地域住民の活動、手法、流儀を

生かした「住民主体の福祉の町づくり」を提唱しており、住民の中のリーダー的存在「活動家」に注目している。¹⁴⁾ この「活動家」は住民同士の助け合いの中で、自発的に地域に必要な仕事を引き受けている人々である。福祉活動に限らず、地域にはこうした「資源」が埋まっており（住民一人一人が「資源」だと言っても良い）、それを発掘し連携するネットワーク作りや、リーダー作り（地域作り指導員 蒲生町世代間交流事業の例）が必要である。

厚生労働省では平成9年の「心豊かで活力ある長寿社会づくりに関する懇談会報告書「21世紀、高齢者が社会を変える－新しい高齢者像の確立をめざして－」¹⁶⁾」において、新しい高齢者像として、「一般的な意味で高齢者は70歳から。画一的な高齢者観や一律の取り扱いを変える必要がある。雇用者層が8割となっており、退職後の社会参加を求めているサラリーマンOBの多い「都市型高齢者像」を念頭に置く必要がある。高齢者は第2の現役世代である。会社人間から社会人間へ」等の提言を行っている。将来的には世代間交流においても高齢者の変化に応じた内容が考えられなければならない。例えば、元気な高齢者との世代間交流のためには、有償ボランティアの導入も検討されて良い。「世代間交流についての調査研究」にあった笠懸町親老児童館の老人職員やシルバー人材活用事業で高齢者の雇用を行っている沖縄県豊見城村ゆたか保育園の例があり、¹⁷⁾ 両例共、子ども達からも保護者からも好評を得ている。交流の内容も、高齢者との交流は「伝承遊び、畑作り、地域文化伝承」と言うような固定的なイメージでは行かなくなるのではないだろうか。

現在は老人クラブが大きな貢献をしているが、平成15年は全国で855万7千人を擁している老人クラブの加入率¹⁸⁾も今後は減少が予想される中、地域によっては老人クラブ以外のボランティアグループの参入が活発化することも考えられる。

、最後に

世代間交流について先行事例を見てきたが、保育園では事例も多く活発な交流が推し進められている。少子高齢化社会の進行が著しい中、地域の実状に応じた対応が工夫されなければならない。又、感染症対策や不審者対策の必要性も高まっている現在、世代間交流にもその影響が及ぶと考えられる。今後は地域の世代間交流について実態調査を行い、社会の変化に応じた世代間交流について考えてみたい。

脚注

- 1) 国立社会保障、人口問題研究所「人口統計資料集」「日本の将来推計人口」平成14.1
- 2) 山崎高哉 重要になる家庭外での世代間の交流 4 社会教育施設での世代間交流の試み
関口礼子編 高齢化社会への意識改革 p59 1996 勁草書房
- 3) 現代保育 昭和62年 2(p4~p13) 4(p4~p15) チャイルド本社
- 4) 保育所地域活動事業実施カ所の推移 厚生労働省 児童家庭保育課調査
- 5) 保育所地域活動事業実施要項 厚生労働省指導家庭局長通知 平成14年5月
- 6) 新潟県保育連盟 <http://www.ans.co.jp/u/niigata/>
- 7) 平成11年度世代間交流活動事例一覧 http://www8.cao.go.jp/kourei/kou-kei/age100_3.htm
- 8) 国際長寿センター 超高齢化社会における世代間システムのあり方についての調査研究
第2部調査編 第3章 p86~115 事例集 p222~ p237 林 廓子
- 9) 多田千尋 遊びが育てる世代間交流 p58~ p61 p68~ p71
- 10) 国際長寿センター 超高齢化社会における世代間システムのあり方についての調査研究
~「老人と子ども」3世代モデルの視点から~
第2部調査編 第1章「老人と子ども」統合ケアについて 多田千尋
第2章世代間交流の効果に関するミクロ調査 新田 淳子、緒方 泰子
- 11) 保育園は、今... 私たちの保育実践 p136 上野 隆子 日本保育協会1999
- 12) 深谷 昌志 家庭内での世代間交流 関口礼子編 高齢化社会への意識改革 p37~ p50
- 13) 山崎高哉 重要になる家庭外での世代間の交流 p64、p65
- 14) 木原 孝久・栃木県社会福祉協議会編 栃木県足尾町の人たちに学ぶ 住民主体の「福祉の町づくり」の
手法 p6~ p9 p28~ p33 筒井書房 1994
- 15) 心豊かで活力ある長寿社会づくりに関する懇談会報告
<http://www1.mhlw.go.jp/houdou/0903/h0325-5.html>
- 16) 保育園は、今... 私たちの保育実践 p209~ p213 玉城 雄幸
- 17) 全国老人クラブ連合会 [wysiwyg://main.4/http://www4.ocn.ne.jp/~zenrou/html/club.html](http://www4.ocn.ne.jp/~zenrou/html/club.html)